

2021年6月13日 礼拝説教要旨

詩編講解説教64「無垢な人」

詩編64：2～11、ローマ12：17～21

詩編第64編は、分類としては「嘆きの詩編」に入ります。「神よ、悩み訴えるわたしの声をお聞きください。敵の脅威からわたしの命をお守りください」（2節）敵の攻撃を恐れ、悩み訴えるという状況がここにはあります。その攻撃というのは具体的には言葉によるものと考えられます。「彼らは舌を鋭い剣とし、毒を含む言葉を矢としてつがえ」（4節）とあります。そこには何らかの言葉の暴力があるのでしょうか。この詩人がダビデということであれば、彼は王でしたから、自分を妬む者の陰口、誹謗中傷の言葉、根拠のない噂話がどこからともなく聞こえてくるというようなことは日常的にあったと考えられます。人が権威、権力を持つというのは、言葉による攻撃、批判をある程度、覚悟する必要があります。

しかし実際わたしたちは些細な言葉一つで落ち込んだり、気持ちが大きく揺れ動いたりします。最近、人気のあるテニス選手が会見を拒否して、結果として大会を棄権することになりました。会見でいろいろな質問を受け心が傷つくという経験をして会見に出るのが苦痛になってしまった。その時に世間の反応は最初とても厳しいものでした。プロなんだから会見は当たり前だ。義務だ。ところが彼女がメンタルのことを公表した途端に批判は止まりました。それは逆にそこまで彼女がしなければ気づかないということです。だから言葉はどんどんエスカレートしていきます。容赦ない。パワハラの問題でも、よく指導のつもりだったとか、打っても響かないから厳しく言ったという弁解がなされます。でも人は内心深く傷ついているということを知らなければなりません。そのようにして人の心は壊れていくのです。人の心はとても複雑であり、繊細で傷つきやすいものです。わたしたちはそのことをわきまえる必要があります。ただ上に立つ者であっても、どのような立場であっても、またどんなに気をつけていても、この社会を生きていく中でわたしたちは様々な言葉の脅威にさらされ続けることに変わりありません。家庭で、学校で、職場で、教会も例外ではないでしょう。人が交わりを持てば必ずそこには争いが生まれ、対立が起こります。それが罪の現実です。では、どうしたらよいのでしょうか。

64編を読む中で、どうしても心に留まる言葉があります。それは5節の「無垢な人」という言葉です。「隠れた所から無垢な人を射ようと構え、突然射かけて、恐れもしません」（5節）「無垢」というのは、日本語では汚れがないという意味で、よく「純真無垢」と言います。子どもに対して無垢と言います。ただ聖書において無垢というのは、神さまに対して信仰深いという意味で用いられます。有名なところではヨブ記の最初でヨブは「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた」（1：1）とあります。元のヘブライ語では「タム」という言葉ですが、辞書で最初に出てくる意味は「完全」「正しい」という意味です。神さまの御前に「完全で正しい」ということです。また64編では、別の表現もあります。「主に従う人は主を避けどころとし、喜び祝い、心のまっすぐな人は皆、主によって誇ります」（11節）の「主に従う人」「心のまっすぐな人」これもまた無垢ということでしょう。心をまっすぐに神さまに向けている。そこに無垢な状態があります。

ちなみに11節に「主を避けどころとし」とあります。原文は「神の中に逃げ込む」ということです。どんな言葉の攻撃の中にあっても、わたしたちは無垢であるということにおいて、神さまに逃げ込み、その攻撃をかわすことができる。そして最後は喜び祝うことができる。わた

私たちは普通に暮らしていても必ず人の言葉に傷つくでしょう。でもその傷は最後神さまの言葉によって癒され、回復される、その約束がここにあるということではないでしょうか。

では具体的に無垢であるということはどういうことでしょうか。「神は彼らに矢を射かけ、突然、彼らは討たれるでしょう。自分の舌がつまずきのもとになり、見る人は皆、頭を振って侮るでしょう」（8～9節）「彼ら」というのは言葉巧みに攻撃を仕掛けてくる敵の存在のことです。その者たちが自分の仕掛けた矢、攻撃の言葉によって自滅する様子がここにあります。「墓穴を掘る」と言います。ここを読みながら思い出した聖書の箇所がローマの信徒への手紙でした。「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」（12：19）神さまが正義を行われる。そのことを信じること。自分が仕返しをして正義を行うのではない。神さまにお任せする。そうすると神さまが「燃える炭火を彼の頭に積む」（ローマ12：20）のです。それを信じて委ねる。それが何より無垢であること、神さまに心を向けている人の行動なのではないでしょうか。

関連して、10節に「人は皆、恐れて神の働きを認め、御業に目覚めるでしょう」とあります。この「目覚める」というのは「悟る、よく考え、熟考する」ということです。ここは攻撃した者が自滅していく様を見て、神さまの御業に目覚めるという意味に捉えられますが、一方で、カットとなって自分が仕返しをする前に、立ち止まってよく考えること。自分にも非があるのではないかと考える。すぐ答えを出すのではない。神さまの解決を待つ。そういう姿勢が求められているようにも思うのです。何れにしても、自分が正義を行うのではなく、神さまの正義を待つ、そこに委ねることに最善のことがある。それが無垢であるということです。

でも人間は果たして神さまの御前に完全で正しく、無垢であり続けることができるのでしょうか。答えは否です。無垢になれないゆえに、わたしたちはお互いに裁き合い、傷つけ合い、そしてこの傷を自分でもどうすることもできず悩み続けるのです。それが罪の現実です。でもだからこそイエス・キリストが来てくださったのではないのでしょうか。イエス・キリストだけが神さまの御前に無垢であり続けられた。それはわたしたちのためです。無垢になれないわたしたちのために、あの十字架において、どんな悪口を浴びせられても、黙ってこれに耐えてくださいました。神さまの義が行われるのを待って、神さまに従い続けられた。わたしたちはこのキリストに結ばれて初めて御前に無垢であることができるのです。

正義は神さまの元にあります。人間がどんなに正義を主張しても、それはことごとく罪に汚れています。その人間が行う正義、人間が語る言葉ほど虚しいものはありません。神さまの御前に立ち返りましょう。心をまっすぐに神さまに向け、無垢でありたいと思います。神さまは必ずその御言葉によって正義を行い、傷ついたわたしたちを癒してくださいます。